Peter Pan の Neverland と二冊の *Pooh* 本の「森」
——失われる場所、保持される場所——

半　田　涼　太

はじめに

J. M. Barrie（1860年〜1937年）の *Peter Pan*（1911年刊）に Neverland と呼ばれる場所が登場する。Wendy、John、Michael の Darling 三きょうだいは Peter Pan に連れられてイギリスから Neverland へ行く。同作品の多くの部分は、この Neverland での出来事を語ることに割かれている。

A. A. Milne（1882年〜1956年）の二冊の *Pooh* 本、すなわち *Winnie-the-Pooh*（1926年刊）及びその続篇の *The House at Pooh Corner*（1928年刊）に "the Hundred Acre Wood"、あるいは単に「森（the Forest）」[1] と呼ばれる場所が登場する。これら二冊の *Pooh* 本は、Christopher Robin の父親が、Christopher Robin や彼が所有するぬいぐるみ達が登場する物語を Christopher Robin に語って聞かせるという体裁がとられている。そしてその物語——つまり物語内物語——の舞台が、この「森」だ。二冊の *Pooh* 本の大部分は、この「森」での出来事を語ることに割かれている。

先行研究において、この二つの作品（厳密には三作品であるが）が比較されていることがある。例えば Humphrey Carpenter と笹田裕子は、二冊の *Pooh* 本について論じる際に *Peter Pan* を引き合いに出し、両作品を比較している。興味深いことに、Carpenter と笹田は同一の点に着目していながら、相反する結論を導き出している。すなわち、Carpenter は二冊の *Pooh* 本の結末部に *Peter Pan* との類似性を見出しており、その一方で、笹田はそこに *Peter Pan* との違いを見出しているのである。本論文では、この矛盾した見解が生じる原因を明らかにする。その際に要点となるのが、上述の Neverland 及び「森」という場所と、二冊の *Pooh* 本が採用している物語内物語という構造である。

これら Neverland と「森」は、どちらも同じように、そこで物語が展開する特別な場所だ。後に具体的に示すが、これら二つの場所は共通して人生の特定の一時期と密接な関わりを持っている。そのため、両者の共通点と相違点を検討することによって、それぞれの作品が提示する、その人生の一時期に対する態度が明らかになると考えられる。本論文ではこの点についても考察を行う。先取りして述べると、この考察によって、両作品において「学問」が重要な事柄として扱われていることも明らかとなるだろう。

1．同時に二つの場所に存在することはできるか——物語及び作中人物の二重性——

Peter Pan では「子供」がどのようなものであるのか、また作中人物のうち誰が「子供」であるのかがしきりに提示される一方で、二冊の *Pooh* 本では「子供」がどのようなものであるのか、作中人物のうち誰が「子供」であるのかといったことが提示されることがほぼない。ただ一か所、二冊の *Pooh* 本の最後、つまり *The House at Pooh Corner* の最後で、Christopher Robin に対して "a little boy" (176) という呼称が用いられているだけである。ここに至り、初めて Christopher Robin が「子供」であることをテクストに依拠して決定することができる。

しかしながら、Humphrey Carpenter は *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature* において次のように述べている。"But then all the characters in the Pooh books are children in their ways of reacting to the world; only the motherly Kanga has predominantly adult characteristics, and she seems to have been included in the stories so that, in her company, the other apparently grown-up characters can be seen as the children they really are" (203). そしてこの後で、"The only real adult in Pooh's world is Christopher Robin" (203) と述べている。Jackie Wullschläger も、*Inventing Wonderland: The Lives and Fantasies of Lewis Carroll, Edward Lear, J. M. Barrie, Kenneth Grahame and A. A. Milne* において同様のことを述べている。"The toys are breathtakingly simple figures who mirror typical child characteristics or moods" (188). そしてこの少し後で、"He [Pooh] is an image of every child" (189) と断言している。このように、二冊の *Pooh* 本に登場する作中人物のうち誰が「子供」的であり、誰が「大人」的であるかといった主張がなされることがあるが、それは論者自身が持つ「子供」観や「大人」観に依拠した見解であり、作品内でそのようなことが明示されることはない。

その一方で、*Peter Pan* では「子供」や「大人」についての言及が散見され、「子供」とはどのようなものであるのかといったことや、作中人物のうち誰が「子供」であり、誰が「大人」であるのかといったことが明確に提示される。そのような例を一つ示そう。"Off we skip like the most heartless things in the world, which is what children are, but so attractive; and we have an entirely selfish time; and then when we have need of special attention we nobly return for it, confident that we shall be embraced instead of smacked" (129).「子供」がどのようなものであるのかについて、語り手が自らが持つ見解を提示している。また、Peter や Wendy、John、Michael といった作中人物達に関しては、彼らが「子供」であることが随所で明確に示される。このように、*Peter Pan* では「子供」というものが意識的に言及される。しかしそれに対して、先に述べたように、二冊の *Pooh* 本には「子供」に関する言及がほぼない。作品が提示する「子供」表象について考察する上で、この点は厳密に留意する必要がある。

Christopher Robin の父親、すなわち物語の語り手であり、物語内において "I" と一人称で指し示される人物は、「森」に足を踏み入れることがない。ところで、これは厳密かつ明確にしておくべき点であるが、本論考では、この「語り手」は二冊の *Pooh* 本の作者である A. A. Milne のことを含意しない。さて、先に述べたように、二冊の *Pooh* 本は、Christopher Robin

の父親が、Christopher Robin や彼が所有するぬいぐるみ達が登場する物語を Christopher Robin に語って聞かせるという体裁がとられている。そして彼は、彼自身が語る物語に自分自身を登場させない。物語内の物語に登場する人間は、つまり「森」に足を踏み入れる人間は、Christopher Robin ただ一人だ。さらに、二冊の *Pooh* 本は、Christopher Robin が「森」を出て行かなければならなくなって幕を閉じる。これらの二点、すなわち「森」に足を踏み入れる人間が Christopher Robin ただ一人であるという点、及び、Christopher Robin が「森」を出て行かなければならなくなるという点から、「森」は特定の人だけが訪れることができる特別な場所であることが了解される。

Christopher Robin が「森」を出て行くことに関して、物語の最後で奇妙な説明が付される。それは次のものだ。

> So they [Christopher Robin and Pooh] went off together. But wherever they go, and whatever happens to them on the way, in that enchanted place on the top of the Forest a little boy and his Bear will always be playing. (*The House at Pooh Corner*, 176)

この引用箇所は、二冊の *Pooh* 本のまさに最後の一文である。Christopher Robin と Pooh は「森」を出て行くにもかかわらず、しかし二人はいつでも「森」の魔法の場所で遊んでいるという。これはどういうことか。作品内にこのことに関する明確な説明はない。以下、この謎について考察を行う。

まず、この最後の箇所に関する先行の論考を概観する。Carpenter は、先述の著書で次のように述べている。"[...] one is inclined to regard it as a kind of *envoi*, a goodbye to an entire Golden Age. But it is a false effect, a piece of whimsy on Barrie lines rather than an organic part of Milne's creation" (205). また、この後で次のように述べている。"Milne seems to be preparing us for some event not unlike Christ's ascension. On the other hand, he seems also to envisage a Peter-Pan-like state of perpetual continuation, in which Christopher Robin is trapped for ever within childhood" (205). Carpenter はこのように述べているが、しかし物語内で Christopher Robin が「森」を出て行くことが示されるため、この説明では不充分である。

Carpenter は二冊の *Pooh* 本と *Peter Pan* の類似性を主張しているが、その一方で両者の相違を主張している論者もいる。笹田裕子は『現代英米児童文学評伝叢書 4　A. A. ミルン』において次のように述べている。「この最後の箇所で、ミルンは魔法の場所がいつでもそのままそこにあること、そして大人になってからも、いつでも訪ねることができる場所であることを保証する。大人が訪れることができるというのは、バリのネヴァー・ネヴァー・ランドとの最大の相違点である。『プー』の森の魔法の場所は、永久に不滅なのである」(76)。ここにある「ネヴァー・ネヴァー・ランド」という語は演劇版に登場するものであり、1911年の小説版には登場しない。しかし、この「ネヴァー・ネヴァー・ランド」を1911年の小説版に登場する Neverland と考えても差し支えないだろう。さて、笹田はこのように述べているが、しかし「森」は本当に「大人」が訪れることができる場所なのだろうか。そうであるならば、なぜ Christopher Robin は「森」を出て行く必要があり、またなぜ Christopher Robin 以外の人間が「森」に足を踏み入れるこ

とがないのか。さらに、笹田の主張は次の点でも先の Carpenter の主張と相容れない。すなわち、Carpenter は、Christopher Robin は「森」に居続けることで永遠に「「子供」期」に捕らわれると主張し、その一方で笹田は、「大人」も「森」を訪れることができると主張している。なぜこのような矛盾した見解が生じるのか。

実は、どちらの主張も Christopher Robin の二重性を見落としているためにこのような混乱が生じている。このような矛盾は、二冊の *Pooh* 本の構造を考慮に入れることによって解決の方向に導くことができる。とはいえ、作品内で「子供」と「大人」の分割が明示されない中で論者が両者を分割した場合、それによって無理が生じるため、完全に合理的に説明することはできなくなる。したがって本論考では、作品内でほぼ言及されることがない「子供」や「大人」という概念に依拠することなく、Christopher Robin 及び「森」の前途を合理的に提示する。

先に述べたように、二冊の *Pooh* 本では物語内物語の構造がとられている。したがって、Christopher Robin は同時に二人存在している。つまり、父親が語る物語を聴く Christopher Robin と、その物語内に登場する Christopher Robin の二人が同時に存在しているのである。さらに言えば、作者の A. A. Milne の息子の Christopher Robin もおり、都合三人の Christopher Robin がいることになる。しかし、本論考では最後の Christopher Robin については考察の対象外とする。

実は、Frederick C. Crews が、Christopher Robin の二重性に注目することの重要性を既に訴えている。Crews は Harvey C. Window の名のもとに書いた試論、"Paradoxical Persona: The Hierarchy of Heroism in *Winnie-the-Pooh*" (*The Pooh Perplex: A Freshman Casebook* 所収) で次のように述べている。"The fatal mistake that has been made by every previous Poohologist is the confusion of Milne the writer with Milne the narrator, and of Christopher Robin the listener with Christopher Robin the character. These are not two personages but four, and no elementary understanding of *Pooh* is possible without this realization" (5-6). 同試論と本論文は、各人物の二重性を指摘し、それらの人物を厳密に区別することの必要性を提言するという点では一致している。しかし、同試論が提言する各人物の区別の方法と、本論文で提言する区別の方法は一致していない。また、同試論は二冊の *Pooh* 本の結末部には言及していない。本論文では、Christopher Robin が二重性を帯びているという事実に立脚した上で二冊の *Pooh* 本の結末の解釈を行い、Christopher Robin と「森」の前途を提示する。

本論考で注目する二人の Christopher Robin、すなわち父親が語る物語を聴く Christopher Robin と、その物語内に登場する Christopher Robin は、同一人物とは言えないほどに異なっている。物語内物語の中に登場する Christopher Robin は他の作中人物達から頼られる存在であり、それだけでなく、いわゆる機械仕掛けの神のような役割（つまり、困った事態を収束させて大団円をもたらす役割）を何度か担う。しかしその一方で、その物語を聴く Christopher Robin は、それとは対照的に、父親に頼りきりの人物だ。Christopher Robin の役割について、Carpenter と Wullschläger も同様のことを指摘している。Carpenter は、"*deus ex machina*" (204)、さらには "God" (204) という語を用いて Christopher Robin のことを説明している。Wullschläger は次のように述べている。"Christopher Robin [...] is the most omnipotent of all child-heroes, the *deus ex machina* who makes all come right" (188). しかしながら、

Carpenter も Wullschläger も、Christopher Robin の二重性には言及していない。Carpenter に関しては、三人の Christopher Robin を同一視していることが明確に了解される。Carpenter は次のように述べている。"Christopher Robin has been presented to us at the beginning of *Winnie-the-Pooh* not as a god, but as a child (the author's son) listening to a story about himself and his toys" (204). さらに、厳密には、物語内物語の中の Christopher Robin は、常に機械仕掛けの神のようであったり、常に全知全能であったりするわけではない。例えば、*Winnie-the-Pooh* に次のような事例がある。彼は "North Pole" がどのようなものであるのかわからず、Rabbit に次のように尋ねる。"What does the North Pole *look* like?" (110). そして最終的に、"North Pole" は「棒」の一種であると結論づける。また、蜂蜜を入れるための壺が、Christopher Robin 自身と Pooh、それから Piglet の三人が上に乗るには小さすぎるということで、Christopher Robin は Pooh に次のように尋ねる。"That makes it smaller still. Oh, Pooh Bear, what shall we do?" (129). そして、Pooh が壺の代わりに逆さまにした傘の上に乗るという方法を思いつき、問題は解決する。以上のような事例から、物語内物語の中の Christopher Robin が常に機械仕掛けの神のようであったり、常に全知全能であったりするわけではないことが了解される。

上述のように Christopher Robin は二人いるため、たとえ一人の Christopher Robin が「森」にいることができなくても、もう一人の Christopher Robin は「森」にいることができる。つまり、父親が語る物語を聴く Christopher Robin が「森」にいることができなくても、その一方で、物語内物語の中の Christopher Robin は「森」に居続けることができる。Christopher Robin と Pooh は、語り手が言うように、彼らがどこに行こうと、彼らに何が起ころうと、いつでも「森」の魔法の場所で遊んでいるのである (*The House at Pooh Corner,* 176)。*The House at Pooh Corner* の序文にあたる "CONTRADICTION" は次の一文で締め括られている。"But, of course, it isn't really Good-bye, because the Forest will always be there . . . and anybody who is Friendly with Bears can find it" (n. pag.).

論点を *Peter Pan* に移そう。二冊の *Pooh* 本の場合と異なり、Wendy や John、Michael は Neverland を出たらそこに居続けることはできない。イギリスに戻るか Neverland にとどまるか選ばなければならない。Wendy はいったん Neverland を離れた後にも何度かそこを再訪するが、その時にはイギリスにいるのか Neverland にいるのか選ばなければならない。同時に二つの場所に存在することはできないのである。これは Peter も同様であり、彼は Neverland にとどまることを選ぶ。このように、その場所にどのように存在するのかという点において、「森」と Neverland には違いがある。この違いは、両作品が提示する、人生の特定の一時期に対する態度を把捉するための要点となる。これに関しては、第 3 章で詳述する。

先に述べたように、二冊の *Pooh* 本は、Christopher Robin が「森」を出て行かなければならなくなって幕を閉じる。Christopher Robin は、「何もしない」ではいられなくなるために「森」を出て行かなければならないという。*The House at Pooh Corner* の終盤で、Christopher Robin と Pooh が次のやり取りを交わす。

'I'm not going to do Nothing any more.'

'Never again?'
'Well, not so much. They don't let you.' (174-175)

では、彼は何もせずに何をするのか。彼がすべきこととは「学問」だ。このことから、二冊の *Pooh* 本において「学問」が重要な事柄となっていることを窺い知ることができる。同様に、*Peter Pan* でも「学問」が重要な関心事となっている。次に、両作品で「学問」がどのように扱われているのかについて検討を行う。

2．*Peter Pan* 及び二冊の *Pooh* 本における「学問」の扱い

Peter は、Wendy の母親に向かって次のように言う。"'I don't want to go to school and learn solemn things,' he told her passionately. 'I don't want to be a man. O Wendy's mother, if I was to wake up and feel there was a beard!'" (193). この発言から、Peter が、学校へ行って「学問」を行うことが "man" になる、つまり「大人」になることへの一歩となると考えていることが了解される。彼はずっと「子供」で居続けたいと思っているが、学校へ行くことはその彼の望みを潰してしまう要因となるのである。

学校について Peter が上記のように述べるが、では *Peter Pan* で学校はどのように扱われているのだろうか。物語の終盤で、もともと Neverland にいた六人の男の子達がイギリスに行ってそこに住むことにする。そして彼らは「当然のように」学校に行くことになる。そのことについて、次のように記されている。"Of course all the boys went to school" (194). この後に、次のような事実が提示される。"Before they had attended school a week they saw what goats they had been not to remain on the island; but it was too late now, and soon they settled down to being as ordinary as you or me or Jenkins minor. It is sad to have to say that the power to fly gradually left them" (194-196)[2]. 彼らは Neverland を離れた後に学校に通い、Neverland へ行く唯一の方法である飛行の能力をやがて失ってしまう。学校と彼らの関係に関する説明に続いて、彼らが飛べなくなったという事実が述べられている。このことから、学校へ行くことが、彼らが飛行の能力を喪失した原因——少なくとも原因の一つ——となっていると考えられる。語り手は、彼らが「平凡 (ordinary)」になってしまったと言いさえする。このように、*Peter Pan* では学校へ行って「学問」をすることがその人の人生における一つの転換点となっており、それは望ましくないものとして提示される。

Neverland にいる時に、Wendy 達が学校で行うことを真似する場面がある。Wendy が、John と Michael が両親のことを忘れているようであることに気付き、学校での試験を模して両親に関する問題を出す。"[S]he [Wendy] tried to fix the old life in their [John's and Michael's] minds by setting them examination papers on it, as like as possible to the ones she used to do at school" (91). そして、Neverland にもともといた男の子達もこれに参加する。"The other boys thought this awfully interesting and insisted on joining" (91). しかし Peter はこれに参加しない。理由は次のものだ。"Peter did not compete. For one thing he despised all mothers except Wendy, and for another he was the only boy on the island who could

neither write nor spell; not the smallest word. He was above all that sort of thing" (91). ここでは、Peter が「学問」や「学問」的な事柄に関わらない様子が二重に示されている。一つは、Peter が書くことも綴ることもできないという事実だ。書くことや綴ることは「学問」的な事柄であり、それをすることができないということは、Peter が「学問」に関わってこなかったことを示唆する。もう一つは、この遊びに参加しないことそれ自体だ。この遊びは学校で行われることを真似したものであり、これに参加しないのは示唆的だ。先述のように、Peter は学校へ行って「学問」を行うことが「大人」になることへの一歩となると考えており、これを忌避する。そのことを鑑みると、ここで後に学校に通うことになる人々がこの遊びに参加し、その一方で Peter のみがこの遊びに参加しないという事実は意義深い。この箇所が後の展開を予示していると見ることもできる。

書くことや綴ることといった「学問」的なことだけでなく、Peter はあらゆる知識を身につけない。Peter はいったん覚えたさまざまなことを不自然なほどに忘却するため、記憶の忘却が Peter の特質の一つとなっている。例えば次のような事例がある。Peter は空を飛んで Wendy 達を Neverland に案内する際に、Wendy 達のもとから急にいなくなってしまうことがある。その間に Peter は一人で冒険をしてきているのであるが、彼はその冒険のことを覚えていない。そのため、Wendy は心配になって次のように述べる。"And if he forgets them so quickly [...] how can we expect that he will go on remembering us?" (51). 実際に Peter が Wendy 達のことを忘れているようであることが示される。"Indeed, sometimes when he returned he did not remember them, at least not well. Wendy was sure of it" (51). さらに、後に Peter は、Hook 船長や Tinker Bell といった、深く関わりを持った人物達のことさえをも忘れ去ってしまう (196)。

また、Wendy が Neverland を離れた後に、次のような事実が提示される。"[S]he [Wendy] felt she was untrue to him [Peter] when she got a prize for general knowledge" (198). これは学校での出来事であろう。この Wendy の心情から、Peter が、知識を身につけることや「学問」や学校を忌避していることを窺い知ることができる。

このように、*Peter Pan* では「学問」や学校、さらには知識を身につけることまでもが否定的に提示される。次に、二冊の *Pooh* 本で「学問」がどのように扱われているのか検討を行う。

まず、*Winnie-the-Pooh* について述べる。同作品の "INTRODUCTION" に、「学問」的な事柄である掛け算が登場する。"[I]t is very comforting to feel him [Piglet] when you are not quite sure whether twice seven is twelve or twenty-two" (n. pag.). この一文は二冊の *Pooh* 本の企図を象徴的に表しているため、特筆に値する。ここでの主眼は、学校での授業中に掛け算の答えがわからなかった時に、ポケットの中にいる Piglet が慰めを与えてくれる、ということだ。これは、たいていの読者が読み取れることであろう。それと同時に、掛け算を知っている読者は、「七掛ける二」の答えが「十二」でも「二十二」でもないことに気付くであろう。このことに気付くことができる読者は、この箇所からおかしみを見出すことができる。したがってこの一文は、掛け算を知っている読者にとっても、掛け算を知らない読者にとっても、読む価値があるものとなっている。このまま掛け算を類比的に用いて説明を続けると、例えば、掛け算を知らなければ何も伝わってこないような作品も時にはある。そのような、特別な知識や考察を読者に

要求するものは、難解な作品だ。これまで述べてきたように、二冊の *Pooh* 本はいささか複雑な構造を有している。しかしながら、二冊の *Pooh* 本は単なる複雑な作品ではなく、複雑さと単純さを併せ持った作品であるため、諸々の複雑さを有していながら難解なだけの作品にはなっていない。そのため、より複雑な層を読み取って理解することができる読者もこの作品を楽しむことができ、また、より単純な層しか読み取って理解することができない読者も、それはそれでこの作品を楽しむことができる。語り手は、彼が語って聞かせる対象である Christopher Robin のような人々、つまり掛け算を知らないような就学前の人々だけでなく、掛け算を知っているような、就学前の人々よりも多くの知識を持った人々にも語りかけているのである。この掛け算の例を始めとして、Pooh がしばしば行う荒唐無稽な論理的考察や言葉遊び、言葉遊びと紙一重の言葉間違い、あるいは言葉遊びと表裏一体の言葉間違いといったことから、このような意図を読み取ることができる。

論点を *Winnie-the-Pooh* における「学問」に移そう。*Winnie-the-Pooh* には、上述の掛け算及び言葉遊び等の英語に関連するものを除けば、「学問」的な事柄はほぼ出てこない。さらに、上述の掛け算に関しては、その答えの正誤が頓着されず（この掛け算の正しい答えは提示されていない)、言葉遊びに関しては、例えば "North Pole" の "Pole" が、正確には「棒」であるのか「極」であるのかが頓着されておらず、同書では「学問」的な正確さが求められていない。それに対して続篇の *The House at Pooh Corner* になると、より多くの箇所で「学問」的な事柄や「学問」そのものが顔を覗かせる。注目すべきは、「学問」そのものが言及されるようになることだ。

まず、*The House at Pooh Corner* の序文にあたる "CONTRADICTION" で「学問」の存在がほのめかされ、さらに「学問」が物語の存立を脅かす様子が示唆される。語り手が Christopher Robin から "What about that story you were going to tell me about what happened to Pooh when —" (n. pag.) と言われると、語り手は急いで次のように述べる。"What about nine times a hundred and seven?" (n. pag.). Christopher Robin から物語をせがまれ、語り手は「学問」的なことを口にしてそれを躱している。このような行動をとった後で、語り手は次のように独白する。"How did the last one begin? 'One day when Pooh was walking in the Forest, there were one hundred and seven cows on a gate . . .' No, you see, we have lost it" (n. pag.). このように、「学問」的な事柄によって物語が失われてしまうことが示される。しかし、ここで失われてしまったのは新たな物語だ。語り手が物語を新たに語れなくなっても、既に語られた物語は失われない。このすぐ後で語り手は次のように述べる。"Well, here are some of the other ones, all that we shall remember now" (n. pag.). こうして *The House at Pooh Corner* の本文が始まり、物語が語られる。このような物語の存続の永続性が、二冊の *Pooh* 本と *Peter Pan* の決定的な違いである。

同書の第 5 章で、Christopher Robin が午前中に「森」にいないという事実が明らかとなる。最初に Rabbit がこのことに気付き、なぜ Christopher Robin が午前中に「森」にいないのか、彼はこの謎を解き明かそうとしてぬいぐるみ達を尋ねて回る。最終的に Eeyore がこの謎の答えを明らかにするが、その前に Eeyore と Piglet がアルファベットの "A" という文字についてやり取りを交わす様子が描出される。

'Do you know what A means, little Piglet?'

'No, Eeyore, I don't.'

'It means Learning, it means Education, it means all the things that you and Pooh haven't got. That's what A means.' (85)

ここで「森」に「学問 (Learning)」や「教育 (Education)」というものが突然に出来する。この後で Rabbit は Eeyore と出会い、彼に "What happens to Christopher Robin in the mornings nowadays?" (87) と尋ねる。すると Eeyore が Rabbit に、そしておそらくは Piglet にも向けて、次のように言う。"What does Christopher Robin do in the mornings? He learns. He becomes Educated. He instigorates — I *think* that is the word he mentioned, but I may be referring to something else — he instigorates Knowledge" (87). このようにして、Christopher Robin が「学問」と関わり始めたことが明らかとなる。なお、"instigorates" は原文に従っている。Eeyore か、あるいは Christopher Robin が、何かの語を間違えているのである (発音や意味から、正しい語として "integrates" や "investigates" が考えられるが、しかしどちらの語も、目的語である "Knowledge" と適合しないように思われる)。

さらに物語が進むと、「学問」が「森」により一層浸透していることが明らかとなる。第 7 章に次のような記述がある。

The word 'lesson' came back to Pooh as one he had heard before somewhere.

'There's a thing called Twy-stymes,' he said. 'Christopher Robin tried to teach it to me once, but it didn't.' (108)

Christopher Robin が Pooh に何かを「教え (teach)」ようとしたことが明らかとなるが、しかし Christopher Robin が Pooh に教えようとしたことを Pooh は "Twy-stymes" と言っていて意味を成しておらず、また Pooh 自身、"Christopher Robin tried to teach it to me once, but it didn't." と述べていることから、それはうまくいかなかったようだ。しかしながら、Christopher Robin が Pooh に「学問」的なことを教えようとしたという事実は意義深い。なお、Pooh が言う "Twy-stymes" は、同義である "twice" と "two times" を混同し、さらに単語を区切る箇所を間違えているのであろう。

物語の終わり近くで、Christopher Robin が「唐突に (Suddenly)」Pooh にさまざまなことを話す。それは次のようなことだ。"People called Kings and Queens and something called Factors, and a place called Europe, and an island in the middle of the sea where no ships came, and how you make a Suction Pump (if you want to), and when Knights were Knighted, and what comes from Brazil" (172). しかし Pooh はこれらのことを理解することができない。Pooh は自分が "a Bear of Very Little Brain" であり、Christopher Robin が話してくれることを理解することができず、"Christopher Robin won't tell me any more" (174) と考える。このように、「学問」が Pooh と Christopher Robin の関係を断ち切る要因となりう

ることが示唆される。しかし、このような考えはすぐに否定される。というのも、Christopher Robin の方から、Pooh に後の親交を求めるからである。

第一巻の *Winnie-the-Pooh* では、掛け算はその答えの正誤が頓着されないような扱いであった。それに対し、第二巻の *The House at Pooh Corner* では、特別な状況下でなければ掛け算を放っておくことができないということが示される。それが示されるのは次の箇所だ。"[F]eeling all sunny and careless, and just as if twice nineteen didn't matter a bit, as it didn't on such a happy afternoon" (102). ここでは、掛け算を基本的には常に心に留めておかなければならないということが逆説的に示されている。さらに、語り手が読者にわざわざ引き算をさせようとする箇所がある。"[H]e [Pooh] had won thirty-six and lost twenty-eight, which meant that he was — that he had — well, you take twenty-eight from thirty-six, and *that's* what he was" (92). *Winnie-the-Pooh* での掛け算と異なり、語り手はこの引き算の答えを提示していない。読者は自分で答えを出さなければならない。先にも述べたように、*Winnie-the-Pooh* での、提示された掛け算の答えは間違っている。しかし、掛け算を知らない読者にとってはその答えが間違っているのか正しいのかは問題とならない。というのも、そのような人にとってはその間違った答えが当座の拠り所となり、答えが提示されない宙吊り状態を免れることができるからだ。

以上のように、第二巻の *The House at Pooh Corner* になると、Christopher Robin が「学問」に関わるようになったことが示されたり、「学問」的な事柄がより頻繁に取り入れられたりと、「学問」が重要な意義を持って作品内に登場してくる。そして最後には、Christopher Robin が「学問」のために「森」から出て行かなければならないことが明らかとなる。付言しておくと、Christopher Robin が「森」から出て行かなければならないのは「学問」をしなければならなくなるためであり、「「子供」期」を脱するためではないことに留意する必要がある。

Peter Pan 及び二冊の *Pooh* 本では、共通して「学問」への関わりが人生における一つの転換点として捉えられている。「学問」に関わることによって、その人はそれまでと変わってしまうことが示されている。その最大の変化が、Neverland や「森」という特別な場所にいられなくなってしまうというものだ。その一方で、両作品には「学問」をめぐって違いもある。*Peter Pan* では、Peter が「学問」との関わりを拒絶し、あらゆる知識を身につけないことが示される。それとは対照的に、二冊の *Pooh* 本では、Christopher Robin が「学問」と関わり始め、さまざまな知識を身につけ始めていることが示される。*Peter Pan* では「学問」が否定的に捉えられているが、二冊の *Pooh* 本においては、「学問」は絶対的に拒絶されるようなものではない。Christopher Robin が「森」にいられなくなってしまうのは、「学問」そのものが原因となるからというよりも、「学問」のために時間を割かなければならないからだ。このことは、先に引用した Rabbit と Eeyore のやり取りからも了解される。この点において、Neverland と「森」、ひいては *Peter Pan* と二冊の *Pooh* 本には相違がある。最後に、この Neverland 及び「森」という二つの特別な場所の共通点と相違点について詳述する。

3．Neverland と「森」、その共通点と相違点

これまで述べてきたように、*Peter Pan* 及び二冊の *Pooh* 本には、どちらも、作中人物がもと

もといる場所と、そことは異なる別の場所の、二つの場所が存在する。両作品は、二つの場所があるという点では共通しているが、しかしその移動方法には違いがある。Wendy や John、Michael がイギリスから Neverland へ移動する様子は描出されるが、それに対して Christopher Robin がもともといる場所から「森」へ移動する様子が描出されることはない。なぜならば、彼のうちの一人は常に既に「森」にいるからだ。

Peter Pan の物語内において、Neverland は実際に行くことができる場所だ。そこは人の心の中にある場所である（11-12）と同時に、また物理的に存在する場所でもある。イギリスと Neverland は直接的に繋がっており、同一の肉体が往来可能だ。それに対して、「森」は物語内に登場する Christopher Robin の父親が生み出す物語内にある場所であり、飽く迄想像上の、観念的な場所だ。実際に往来することはできない。したがって、この点でも先の笹田の主張は当を得ていない。笹田は「大人」も「森」を訪れることができると主張しているが、誰もこの「森」を訪れることはできない。語り手が *The House at Pooh Corner* の "CONTRADICTION" で述べているように、「森」はただ「みつける（find）」ことができるだけの場所である。

Neverland は、いったんそこを出ると、或る人（具体的に言えば Wendy）にとっては時々再訪することができる場所であり、そして別の人（具体的に言えば John や Michael、それからもともと Neverland にいた男の子達）にとっては少し時間が経ったら思い返すことさえされなくなってしまうような場所である。Michael に関しては、次のような事実が提示される。"Michael believed longer than the other boys, though they jeered at him; so he was with Wendy when Peter came for her at the end of the first year" (196). しかし、彼が Neverland を再訪することはなかったようだ。さらに、時々Neverland を再訪する Wendy も、やがてはそこに行くことができなくなる。それに対して、「森」はいつでも Christopher Robin と Pooh が遊んでいる場所である。この点こそ、二冊の *Pooh* 本のメタ的な構造が最大限に生きてくる箇所の一つである。もしも同作品がメタ的な構造でなかったら、Christopher Robin は一人しかおらず、したがって永久に「森」から追放状態となってしまったかもしれない。彼は Peter や Wendy 達と異なり、別の場所で「学問」をしながら、同時に「森」にいることができるのである。先に述べたように、物語内で Christopher Robin が午前中に「森」にいないことが示される。この時に二人の Christopher Robin はその状況が重なり合っており、二人は同一視されうる状態となっている。しかし最後の最後でこの重なりは解消され、彼の不在は見事に覆される。

Peter Pan では Neverland という特別な場所がやがては失われてしまうことが示唆され、それに対して二冊の *Pooh* 本では「森」という特別な場所がいつまでも保持され続けうることが示唆されている。だからこそ、学校での授業中に、ポケットの中にいる Piglet がその持ち主を元気づけることができるのである。それに対して、Neverland や Neverland に関連する物事が、かつてそこにいた男の子達を元気づけてくれることはない。むしろ男の子達は、Neverland の島を離れ、学校に通うようになったことを後悔する。しかし彼らはもはや Neverland に戻ることはできない。語り手によれば、彼らがそこに戻るには遅すぎるのである（194-196）。

おわりに

本論文では、*Peter Pan* の Neverland と二冊の *Pooh* 本の「森」に着目して、両作品の共通点と相違点を浮かび上がらせた。その結果、両作品において「学問」がきわめて重要なものとして扱われていることが明らかとなった。*Peter Pan* でも二冊の *Pooh* 本でも、「学問」への関わりが人生の一つの転換点となっている。両作品において、共通して「学問」への関わりを境にしてその人自身が変化し、その結果、その人と Neverland あるいは「森」との関係性も変化する様子が提示されている。またそれと共に、この共通点を起点にして、両作品の相違点が立ち現れてきた。*Peter Pan* では、「学問」への関わりをきっかけにして、Neverland という特別な場所がやがて失われてしまうことが示されている。このことから、*Peter Pan* では Neverland と関わりを持つことができる人生の一時期を特別視していることが了解される。それに対して、二冊の *Pooh* 本では、「森」という特別な場所がいつまでも保持され続けうるものであることが示されている。このような「森」の在り方や、「森」と Christopher Robin の関係性を合理的かつ明確に把捉する上で、二冊の *Pooh* 本の物語内物語の構造を考慮し、Christopher Robin が二人いることを認識することが不可欠であることが明確となった。

（本論文は2017年度シルフェ英語英米文学会年次大会において行った口頭発表をもとにしている。）

注

1．厳密には、*Winnie-the-Pooh* には "the forest" と "the Forest" という表記が混在している。つまり、頭文字が小文字のものと大文字のものが混在している。文脈上これらの指示対象は同一であると考えられる。なお、*The House at Pooh Corner* には "the Forest" の表記しかない。
2．p. 195は挿絵。

引証文献

Barrie, J. M. *Peter Pan.* Harmondsworth: Puffin Books, 1988.
Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature.* Boston: Houghton Mifflin, 1985.
Crews, Frederick C. *The Pooh Perplex: A Freshman Casebook.* New York: E. P. Dutton, 1965.
Milne, A. A. *The House at Pooh Corner.* London: Methuen Children's Books, 1928.
Milne, A. A. *Winnie-the-Pooh.* London: Methuen Children's Books, 1926.
Wullschläger, Jackie. *Inventing Wonderland: The Lives and Fantasies of Lewis Carroll, Edward Lear, J. M. Barrie, Kenneth Grahame and A. A. Milne.* London: Methuen, 1995.
谷本誠剛、笹田裕子『A. A. ミルン』現代英米児童文学評伝叢書 4．名古屋：KTC 中央出版、2002年.